

# NCS

Nature Conservation  
Society of Hokkaido

# HOKKAIDO

2007年 3 月 NO.133

..... CONTENTS .....

チヨットひとこと.....白木 彩子..... 2	「自然保護学校を終えて」 .....福地 郁子..... 7
「ゴーサインの出た北見道路」 .....武田 泉..... 3	コラム(?).....在田 一則..... 9
北海道各地のニュース..... 4	総会および講演会のお知らせ..... 9
自然保護学校に寄せて.....鮫島惇一郎..... 6	お知らせコーナー.....10



北海道一の巨木になれるかな？

(撮影 荻田 雄輔)

風車と鳥の問題から

ワシの研究をしている関係で、風車と鳥類保全との問題に関わるようになって7年ほどがたつ。当初はほとんど知られていなかったこの問題（鳥類が風車に衝突して死亡する、風車建設が鳥類の生息環境に悪影響を与えるなどのこと）も、ゆっくりではあるが世間にも浸透しはじめ、私の考え方、問題の捉え方も情報が増えるに従って二転三転してきた。



現在、国の温暖化対策として風車を造ることが建設の前提となっているが、国の方針を示す地球温暖化対策推進大綱や、環境省のHPなどで公開されている近年の温暖化ガス排出量増加等に関わる資料を読んでいると、その前提、つまり風車が温暖化対策として全面に押し出されていることが疑わしく思われてくる。風車を建てると同時に温室効果ガスの削減が行われなければならぬのなら、効果は望めない。しかし、その削減努力はかなり不十分なようで、現実には削減どころか増加してしまっている。また、人口が減少しているにも関わらず、そして省エネを進める方針であるにも関わらず、国策は2010年まで電力需要は増加し続けることを前提としている。鳥の問題以前に、より快適（というより贅沢）で便利な生活を追及したまま温暖化ガスの排出を減らす、なんていうムシのいい話が現実的に成立するのだろうか？もっと強力で省エネを進めることが急務なのではないのか？

本来、鳥類の重要な生息地に風車を建設しなければならない理由として挙げられるべきなのは、省エネを進めて、化石燃料を使用する発電電力量を減らして、それでも足りない分を風車によって賄うため、といった図式であろう。研究者らしく、個体群存続に問題のない衝突死亡数はどの程度か・・・といった話に終始するためには、国策で保護対策がとられ、とりわけシンボリックな種であるオジロワシなどの死の重さ以上に、風車が真に温暖化対策に貢献し、彼らの死が無駄死にはならないことが明確でなければ、私は納得しないだろう。知るほどに疑問が出てきて、今の国策は省エネを進めると困る立場の人たちが作ったのでは？新エネルギーの目標比率が少ない割合に抑えられているのにも何か訳があるのでは？と懐疑的になってくる。

この問題について追求することは、鳥類の保全という枠を越え、日本のエネルギー問題や温暖化への取り組み方について私たち一人一人が現状を知り、考え、実行するためのきっかけともなる。かなり複雑な問題で、公開されている情報にも不透明感があるけれど、皆さんも、大綱や環境省、電気事業連合会、NEDOなどのホームページで公開されている資料を見比べつつ、いろいろ考えてみてください。

（当協会理事・網走市在住）

白しら  
木き  
彩あや  
子こ

## 「審議不十分のままゴーサインの出た北見道路」

北海道教育大学岩見沢校助教授 武田 泉

北見バイパスは「一般国道39号線北見道路」が正式名称で、北見市南郊の丘陵部をトンネル・橋で貫く10.4km自動車専用道路である。北海道開発局の施行のため、無料開放を予定している。この道路は既に工事は着工されており、道路本体工事の本格着工直前の取り付け道路や橋脚の建設準備もなされようとしている。

開発局は、昨年末押し迫った12月27日に事業審議委員会を開催した。この部外委員による第三者機関は事業着手から10年を経ている事業の再評価を審議するものである。北見道路については、北見の市民団体から意見書が提出されたため、座長見解によって異例の現地調査も、12月16日に行われている。

この日は案件が全15本中の1つとして、北見道路が審議された。13時半の審議開始から、終了は17時をかなり廻った時刻となった。まず当局側から事業の説明がなされ、続いて提出された意見書へ回答した（この部分配布資料無し）。説明後、委員からの質疑の中で、支障木の伐採3万本や、モニタリングの影響範囲・期間、失われる自然の価値の評価、事業費額の妥当性、等があがったが、とりわけ、交通工学が専門の委員（北大工学部教授）からの、当該バイパス建設時における将来交通量の数値を巡って、当局側は回答に窮し、再回答を余儀なくされた。北見市内の当該バイパスの24時間交通将来量が6,000～8,000台であるのに、北見市郊外（置戸）での現況交通量が千数百台、北見駅前の国道39号線で3,000台程度であり、その交通量は交通工学の常識から全く有り得ない数値で推計方法に疑問がある、という内容であった。この点について、他の案件が終了した16時半過ぎから、再度説明を行うという異例の展開となった。しかし再開後は、当局側は納得が出来る十分な説明は行われず、質問した委員が委員長に対して「この審査会は全員一致が原則か？」と問い質した。そうした中、委員長（北大経済学部教授）は「委員の質問も当該事業の必要性を否定する訳ではない筈だ。」と勝手に総括して、事業推進にGOサインを出してしまった。全くこの議論に合理性に乏しく、茶番としか言いようのない幕切れであった。次に年度末を控えた時期に、北見道路に接続する高速道路（北海道横断自動車道網走線）が緊急整備区間となり、着工を目指して訓子府～北見間（昨年5月）に引き続き、支庁界～訓子府間（3/16）、小利別～支庁界間（3/20）と矢継ぎ早に地元説明会が開催された。訓子府説明会での配布資料によると、この高速道路は主として北見・網走方面と千歳・苫小牧方面の流動が想定され、遠く室蘭・函館方面も視野に入っている一方で、道都・札幌はあまり想定されていない。つまり札幌へは、別ルートの遠軽・旭川経由がメインであり、オホーツク圏から道央圏は贅沢にも2つのルートを建設したい、との意思表示である。また道路特定財源の縮小の懸念の中で、予算が付いた間に何が何でも建設したい、実際の交通機能よりも建設業界に仕事を与えたいという、当局の姿勢が見え隠れしている。さらに3月2日には、美幌町内のJR石北線で普通列車が踏切事故で木材を満載した大型トレーラーに衝突して重軽傷者を出すに至った。

この際、この踏切の道道が実は抜け道として大型車の通行が従来から多く、特に網走から釧路方面への通行が多いと指摘された（北海道新聞報道による）。この区間には、北見バイパスと同様に高速道路延長線的美幌バイパスが「飛び飛び」に建設されているが、利用度は低い。また地元住民によると、現時点では部分開通の美幌バイパスは、女満別空港アクセス以外に利用することは無いという。つまり、部分建設ではバイパス効果が顕著にならない。北見バイパスも全く同様で、このままでは「使われない無駄な道路建設」は、貴重な自然を破壊して将来に禍根を残すだけである。

## ポロトの森で糞さがし

八木橋 諭  
(会 員)

JR白老駅から徒歩で10分ほどのところにあるポロト湖は、ポロト自然休養林の玄関口になる周囲4kmほどの湖である。

総面積約400haの休養林には湖の他に川や湿原があり、四季を通してキャンプ・散策・自然観察等で多くの人に親しまれているが、この森をフィールドとしている地元の自然観察グループが毎月それぞれのテーマで観察会を行っている。

2月には「エゾモモンガの痕跡探し」をテーマにしたグループの観察会があった。

夜行性のエゾモモンガは日中に活動することはめったにないので、その姿を見るには「ねぐら」を見つけなければならない。

エゾモモンガの多くはキツツキ類の古い巣穴や樹洞を利用して生活しているので、見当をつけた木や、その周辺のエゾモモンガが食料を調達していると思われる木の下に糞や食痕を探し、その穴が実際に使われているのか確認しなければならない。

観察会では、大量の糞が見つかった木の近くには数個の穴がある木も見つかった。果たしてこの穴からエゾモモンガが顔を出し愛らしい姿を見せてくれるのか、そしてあの華麗な滑空を見せてくれるのだろうか…。

エゾモモンガ以外にも数多くの野鳥や動植物が生息し、日本の「遊歩百選」にも選定されているポロトの森に、エゾアカガエルの大合唱が聞こえ始めると春もすぐそこである。また、毎年一部の心ない人に踏みつけられ、悲鳴をあげている湿原のミズバショウも健気に春を迎える準備をしています。「ポロトの森の住人」である動植物には優しい気持ちで接してくれることを願っています。  
(白老町在住)



北海道  
各地の

## 蘭越におけるニホンザリガニ生息調査

— 大表 章二  
(会 員)

2004年にニホンザリガニの生息調査を町民の皆さんに呼びかけたところ、幼児から大人まで35名もの方が集まりました。そこで「蘭越ニホンザリガニ探検隊」という組織を作って活動しました。町民から寄せられた情報や地図をもとに、生息していそうな場所に出かけ、15分間に見つけたニホンザリガニについて雌雄の別や体長、体重、周辺環境などを記録しました。その結果7月から10月までに27箇所中10箇所で400尾の生息を確認しました。

翌年からは私個人が調査を続けています。調査内容も生息数だけに限定して、細く長く続けようと思っています。なお「蘭越ニホンザリガニ探検隊」は「蘭越自然探検隊」と改称し、活発に活動を続けています。

3年間の短い調査でも、減少の一途をたどっていることがうかがえます。調査した54箇所中生息を確認できたのは17箇所だけです。一見生息適地と思われても、生息を確認できないところが数多くありました。違いは湧水の有無です。生息地には湧水がありました。湧水があっても見られないことはありますが、湧水が無い場所では、必ずといっていいほどみつかりません。湧水が流れ出すとすぐに農薬などの汚染物質が混入し、生息に不適な水になってしまうことが考えられます。

ニホンザリガニは北海道と北東北にしか生息しない種で絶滅が危惧されています。今後生息環境を破壊する公共工事をさせないなど、少しでもニホンザリガニの保全のために役立てていきたいと考えています。  
(蘭越町在住)

## 平成18年度北海道地域文化選奨受賞

水尾 君尾

(ユウパリコザクラの会事務局長)

地域に根ざした独自の文化活動を行い、地域文化の振興に貢献している団体に贈られる北海道地域文化選奨は、平成19年1月27日 ユウパリコザクラの会が受賞しました。18年前、夕張岳のスキー場開発計画を阻止し、その後、国の天然記念物指定を実現、更に、高山植物の盗掘防止パトロールを続け、一貫して夕張岳の保護活動を続けてきたことが認められました。選考委員の先生は「過去の活動の歴史ではなく、将来も続くこと」を条件に、158団体の中から、全員一致で当会に決定した経過説明がありました。また、高橋はるみ知事が、直接、文化団体に贈る賞は、唯一この選奨だけなのだと、重い言葉に感慨深かったです。自然保護協会の皆様方には、当会発足当初から支えて戴きましたこと厚くお礼申し上げます。  
(夕張市在住)



2007. 1. 27 ホテルシュエパロにて

北海道  
ニュース

### シンポジウム

## 「サングダム問題を考える」

開催日 4月14日(土):札幌市

佐藤水産文化ホール(札幌市中央区北4条西3丁目交洋ビル3F)

4月15日(日):名寄市(開催検討中)

名寄市立大学(名寄市西4条北8丁目1)

時間 13:30-17:00

内容 「天塩川の自然を考える会調査報告」

「パネルディスカッション -サングダム計画はどこが問題か?-」他

問合せ 北海道自然保護協会 011-251-5465

後援 日本自然保護協会、北海道自然保護協会 他

## 自然保護学校に寄せて

自然保護学校長 鮫島惇一郎

北海道自然保護協会では、毎年「自然保護学校」を開いております。今年2007年で10回目をむかえてしまいました。第1回の開校は、1997年でしたから、一昔前ということになりましょうか。

その間、講師役を担ってくださった方々は60名にもなります。現在北海道が抱え込んでいる自然保護の課題と対策が中心ではありますが、ひいては地球規模の課題まで踏み込んだお話に続いてまいりました。身近な課題を解決するには、より幅広い視野に立って、判断、対策を考えなくてはならないということなのです。

生物は一応、植物と動物に分けられておりますが、近ごろどうも人物という区分けをしなくてはならないのかなあと考えています。人物は植物と動物の営みがあつてはじめて存在できる物なのですが、芝居を演じ、機械、器具を造り動かし、命まで操ろうとしています。これはもう人類が、動物の域からはみ出している証でありましょう。豊かであった自然の恩恵を忘れ始めている、ではなく忘れているといっても過言ではないでしょう。

それに加えて、人類が「金の亡者」になっていること（これも動物の域からはみだしております）が、自然界の最大の敵といえましょう。その代表が「開発」と「戦争」です。

「メビウスの帯」というのがあります。裏も表もない存在として知られておりますが、「自然」と「開発」や「戦争」とは、どうもこの関係のように思えてなりません。未来永劫につづく課題かもしれません。

だからといって、手をこまぬいているわけにもいきません。子供や孫、曾孫、その孫たちにも少しでもよりよい生活環境、とりもなおさず自然環境を受け渡してやらなければならないのです。そのためには、まず身近な自然の理解と、破壊からの対策をしっかりと築いてやらねばなりません。これの積み重ねがやがて地球を救う課題に繋がるのです。

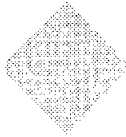


自然保護学校で挨拶する鮫島校長

10年の講座を続けてきて、惜しかったなあと思うことがひとつあります。講師を務めてくださった諸先生の貴重な講義録をきちんと造っておかなかったことです。10年分を一冊の本にしておけば、すばらしい「北海道の自然保護読本」になったのになあと慙愧に堪えません。お詫び申し上げますとともに、これまでのお力添えに心から感謝申し上げます。

最後になりますが、これまで保護学校を支えて下さった福地郁子さんならびに他の方々にお礼を申し上げます。

(当協会専門委員)



## 自然保護学校を終えて

自然保護学校担当常務理事 福地 郁子

自然や自然保護に関わる良質な話題を提供することが目的の協会事業として、1992年から「自然保護講座」を年1回開き、5年続けました。当時、小暮得雄会長が任期を終える最後の理事会の中で、「講座」を発展させ、気軽に市民が受講できる常設の自然保護学校の形を続けて欲しいと希望されました。常設は出来ませんでした。1997年から鮫島惇一郎校長、佐藤謙副校長のバックアップをもらい自然や自然保護に関わる本物の話題提供に10年間学校を開校することが出来ました。開校時の依浩三会長には自然の中味やテーマ性についての確かな助言をもらい、続ける事が出来ました。後の記録にありますように初回は頑張って8講座を行い、2、3回目は昼の部、夜の部と多くの方に受講していただきました。天候の関係で道外や道東の講師が予定通り到着するか、遠くは留萌、伊達、白老などからの受講者が来ているため講義が予定の時刻に終了できるかなど心配の種はつきませんでした。60回の講義中、1度だけ講師の怪我で急遽、他の講師にお願いした事がありましたが、予定通り実施が出来ましたのも事務局、理事の連携によるものと感謝しております。10年間10回の閉校式には簡単な修了証と必ず、鮫島校長の好意により校長手書きの絵ハガキや冊子のプレゼントがなされ受講生共々励まされました。

私自身の知的好奇心は満足しましたが、司会の能力不足から講師の持ち味を充分ご案内出来なかった事を深く反省いたしております。校長も指摘されたように言い訳になりますが、マンパワー不足から講義録から文書をおこせなかった事を本当に残念に思っております。

一旦区切りをつけ今回で終了しましたが、少し時間をいただき、さらに充実した内容の学校がどのような形で出来るか検討したいと思います。

### 自然保護学校記録 自然保護学校長：鮫島惇一郎 副校長：佐藤 謙

#### 第1回 (1997.10.13~1998.1.19)

- 10月13日「身近な自然」鮫島惇一郎（自然環境研究室主宰）
- 10月20日「高山における自然の変遷」高橋伸幸（北海学園大学教授）
- 11月10日「植物版・レットデータブックの現状」高橋英樹（北大付属植物園助教授）
- 11月17日「北の森のけもの達ーヒグマを中心にー」青井俊樹（北大付属苫小牧演習林長・助教授）
- 12月1日「北海道の川の魚たち：過去と未来」前川光司（北大付属雨龍演習林・助教授）
- 12月8日「シマフクロウからみた北海道の自然」早矢仕有子（北大付属動物染色体研究施設）

1998年

- 1月12日「国立公園と国有林」依 浩三（専修大北海道短期大教授）
- 1月19日「どのように自然を護るか」畠山武道（北大法学部教授）市川守弘（弁護士）

#### 第2回

##### 昼の部 (1998.11.12~12.10)

- 11月12日「身近な自然」鮫島惇一郎（自然環境研究室主宰）
- 11月19日「サケのお話」木村義一（前千歳サケのふるさと館館長）
- 11月26日「動物医の本音」森田正治（道東野生動物保護センター長）
- 12月3日「環境ホルモンと自然保護」神原昭子（日本消費者連盟運営委員）
- 12月10日「自然を護るために」依 浩三（専修大北海道短期大教授）

夜の部 (11.11~12.16)

- 11月11日「身近な自然」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 11月18日「動物区の本音」 森田正治 (道東野生動物保護センター長)
- 11月25日「環境ホルモンと自然保護」 神原昭子 (日本消費者連盟運営委員)
- 12月 2日「サケのお話」 木村義一 (前千歳サケのふるさと館館長)
- 12月 9日「移入動物アライグマの現状」 池田 透 (北文学部助教授)
- 12月16日「自然を護るために」 俵 浩三 (専修大北海道短期大教授)

第 3 回

昼の部、夜の部とも同日 (1999.11.10~12.9)

- 11月10日「国後島に見た自然」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 11月19日「海の獣—鱈脚類を知ろう」 和田一雄 (野生生物保護学会会長)
- 11月24日「川の生き物たち」 稗田一俊 (フリーランスカメラマン)
- 12月 1日「統動物医の本音」 森田正治 (道東野生動物保護センター長)
- 12月 9日「渡り鳥は何処へ行く」 大館和広 (当協会理事)

第 4 回 (2001. 1.30~2.27)

- 1月30日「日高山岳の魅力」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 2月 6日「日高横断道路の問題点」 俵 浩三 (専修大北海道短期大教授)
- 2月13日「北海道の動物」 阿部 永 (北大名誉教授)
- 2月20日「日高の植物」 佐藤 謙 (北海学園大学教授)
- 2月27日「壮大な日高の成り立ち」 平川一臣 (北大大学院地球環境科学研究科教授)

第 5 回 (2002. 1.29~3.9)

- 1月29日「ビオトープについて」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 2月 5日「自然観察のこと始め」 俵 浩三 (専修大北海道短期大名誉教授)
- 2月12日「生き物の里をつくる仲間たち」 伊達佐重 (当協会常務理事)
- 2月19日「植物から学ぶ」 佐藤 謙 (北海学園大学教授)
- 2月26日「川を中心とした環境学習」 根岸 徹 (北海道自然観察協議会理事)
- 3月 6日「自然保護講演会と兼ねる」  
「トラジロウ(ヒグマ)の廊下とその保全」 青井俊樹 (岩手大農学部環境課森林科学講座教授・日本クマネットワーク代表)

第 6 回 (2003. 2. 5~26)

- 2月 5日「お花畑から？」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 2月19日「こんなに違うアメリカの野生生物保護政策」 市川利美 (ナキウサギふあんくらぶ代表)
- 2月26日「自然再生推進法で自然は再生できるのか」 佐藤光子 (弁護士)
- 3月 5日「日高山脈のこれから」 俵 浩三 (専修大北海道短期大名誉教授)

第 7 回 (2004. 2.17~3.16)

- 2月17日「北海道の森林の移り変わり」 鮫島惇一郎 (自然環境研究室主宰)
- 2月24日「北海道の公共事業」 俵 浩三 (専修大北海道短期大名誉教授)
- 3月 2日「アセスを読む」 佐藤 謙 (北海学園大学教授)
- 3月 9日「川・ダムを科学的に検証する」 佐々木聡 (フリーランスカメラマン)
- 3月16日「水とダムの法的問題・日米の比較」 市川守弘 (弁護士)

第 8 回 (2005. 3. 2~3.30)

- 3月 2日「知床の世界遺産への現状」 石川幸男 (専修大北海道短期大教授)
- 3月 9日「鳥から見た風力発電施設」 白木彩子 (北大大学院地球環境科学研究科博士研究員)
- 3月16日「野幌森林公園の自然と森林管理」 奥谷浩一 (札幌学院大学教授)
- 3月23日「釧路湿原自然再生事業の経過と現状」 杉沢拓男 (NPO法人トラストサルン釧路理事)
- 3月30日「21世紀の北海道の国立公園」 俵 浩三 (専修大北海道短期大名誉教授)

第 9 回 (2006. 3. 1~3.22)

- 3月 1日「北海道のコウモリ」 柳川 久 (帯広畜産大野生生物管理研究室)
- 3月 8日「北海道の淡水魚・外来魚」 埴山雅秀 (北大大学院水産科学研究院) を予定が講師事故のため急遽変更「コマクサとルビナス、植物の外来種問題」 佐藤 謙 (北海学園大学教授)
- 3月15日「大型猛禽類の現状」 白木彩子 (北大大学院地球環境科学研究科)
- 3月22日「北海道の希少植物保護の現状—ヒダカソウを例にして—」 西川洋子 (北海道環境科学センター自然環境部植物環境科)
- 3月29日「昆虫は北海道の冬をどのようにして越すのか」 片桐千帆 (北大低温科学研究所)

第 10 回 (2007. 2. 6~3. 6)

- 2月 6日「北海道の河川と淡水魚」 埴山雅秀 (北大大学院水産科学研究院教授)
- 2月13日「セイヨウマオオロハナバチの北海道への侵入と在来生物への影響」 永光輝義 (森林総合研究所北海道支所研究主任)
- 2月20日「北海道のアオサギの生息状況とその変遷」 松長克利 (北海道アオサギ研究会代表)
- 2月27日「アライグマ防衛—現状と今後の課題—」 池田 透 (北大大学院文学研究科助教授)
- 3月 6日「スズメの大量死を振り返って」 黒沢令子 (スズメネットワーク事務局)



## コラム

### その2

## 国際惑星地球年 (IYPE : International Year of Planet Earth) を迎えて

在田 一則

第22回国連総会 (2006年12月) は2008年を国際惑星地球年とすることを決議しました。実際の期間はその前後を含む2007-2009年です。国際惑星地球年の目的は、一般にはなじみの薄い地学 (地球科学) が実は我々の生活あるいは人類の将来に深く関連していることをより多くの人に理解していただくことと、地球科学に携わっている者たちに自分らの成果を社会に還元するために「社会のための地球科学」をこれまで以上に意識させることにあります。

地球はすべての生物の基盤であり、自然そのものです。また、地球温暖化、酸性雨、自然災害 (噴火・地震・津波・土砂崩れ・台風など)、エネルギー・鉱物資源の枯渇、地下水汚染、オゾンホールなど21世紀における人類の課題といわれる諸問題 (戦争・核問題・南北問題・宗教問題などの重要課題は除いて) はすべてに地球が関わっており、その多くは地球と人類の相互作用の産物です。

自然保護の問題も地球と人類との相互作用の結果といえます。一般に、自然保護というと有機質自然を考えがちですが、自然には無機質自然もあります。前回紹介したジオダイバーシティの保全です。日本列島は、地球で最大の陸と海の境界にあり、火山噴火や地震が世界でもっとも盛んな地域の一つです。さらに中緯度のアジアモンスーン地帯にあり、侵食され起伏に富んだ地形が、台湾に近い亜熱帯の島から流水の接岸する北海道まで3,000km以上にわたって続くという、地球でも特異な自然環境にあります。いっぽう、日本は人口密度がもっとも大きく、またもっとも工業化した地域です。したがって、日本はジオダイバーシティ保全のモデルケースとなりえます。このようなことを理解していただくことも国際惑星地球年の役割の一つでしょう。

## 2007年通常総会と公開講演会のお知らせ

2007年度通常総会と公開講演会を次の要領で開催いたします。

野外活動には非常に良い時節ではありますが、万障繰り合わせの上、ご参加の程よろしくお願ひ致します。

### 総 会

日 時 : 2007年5月26日 (土) 13:00から15:20まで

場 所 : 北大学術交流会館 会議室 (札幌市北区北8条西5丁目)

\* 総会終了後同じ場所において一般の方も参加した講演会になります。

### 講演会 : 15:30から17:00 (15:20より受付)

演 題 : 「ヒマラヤは我々にどのように影響しているか

—ヒマラヤの生い立ちとアジアモンスーン—

講 師 : 在田 一則氏 (北海道大学総合博物館研究員)

在田一則氏プロフィール

札幌市出身、当協会常務理事

地質学の専門家であり、06年11~12月もネパールに調査に行かれ、3月28日現在再びネパールに行かれています。最新の体験も含めてお話を聞くことができます。

また、北大総合博物館には在田さんの採取された岩石標本が多数展示されています。

**\* お知らせコーナー \***

**寄贈図書紹介**

- 「知床の植物Ⅱ」  
中川元さんより 斜里町立知床博物館編集  
(斜里町・斜里町教育委員会発行)
- 「鳥たちに明日はあるか  
(景観生態学に学ぶ自然保護)」  
スズメネットワーク 黒沢令子さんより  
ロバート・A・アスキンス著 黒沢令子訳  
(文一総合出版発行)
- 「新北海道の花」  
北大出版会より  
梅沢俊著(北大出版会発行)
- 「高尾山のちいさな山の命たち」  
高尾山の自然を守る市民の会 橋本良仁さんより  
(かもがわ出版発行)

**活動日誌**

**2007年1月**

- 14日 サンルダム問題対策会議出席(旭川)
- 17日 第6回拡大常務理事会
- 20日 天塩川水系河川整備計画(原案)の住民説明会傍聴(名寄、士別)
- 25日 エゾシカ保護管理計画の変更に係わる公聴会での公述
- 26日 会報132号発送

**2007年2月**

- 6日 緑資源幹線林道道有林に係わる「第5回」道庁交渉  
第10回自然保護学校(1講)・開校式
- 11日 北海道自然保護連合常務委員会出席
- 13日 自然保護学校(2講)
- 19日 第7回拡大常務理事会
- 20日 自然保護学校(3講)
- 23日 天塩川水系河川整備計画(原案)についての記者会見(旭川市政記者クラブ)
- 27日 自然保護学校(4講)

**要望書など**

- 1月23日 国立・国定公園の指定及び管理運営に関する検討についての要望書(環境省宛)
- 1月25日 天塩川河川整備計画原案についての開発局との会談申入れ書(旭川開発建設部宛) 14団体連名
- 1月31日 天塩川河川整備計画案についての開発局への会談再申入れ書(旭川開発建設部宛) 14団体連名

- 2月6日 緑資源幹線林道のうち道有林部分の事業評価および公益的機能に関する質問書(道知事宛)大規模林道問題北海道ネットワーク5団体連名
- 2月7日 天塩川河川整備計画原案についての開発局への会談再申し入れに関する文書回答の要請(北海道開発局長宛)
- 2月14日 河川行政の民主化を求める要望書提出(国土交通大臣宛)66団体連名
- 2月16日 天塩川河川整備計画原案についての北海道開発局との話し合いの実現に関する要請文(国土交通省北海道局長宛)14団体連名・住民等の意見を尊重した天塩川河川整備計画案の作成を求める要請文(国土交通大臣・道知事宛)14団体連名
- 2月20日 松山森林管理署管内見市川流域におけるサクラマス等の保護に関連した「河床路」改良等の要望書提出(道森林管理局長・松山森林管理署長宛)

**新会員紹介**

2006年12月～2007年2月

【A会員】我妻 尚宏、小平真佐夫

**編集後記**

今回は、年度末の忙しい時期に皆さんに原稿をお願いしましたがどうか年度内に発行することができました。本当に有難うございました。環境について声高に叫ばれる様な時代になっても北海道の自然環境破壊の問題は山積みされています。一人一人が声を上げることで多くの人に問題点を知らしめる事が大事だと思います。

(編集委員 荻田 雄輔)

**会費納入のお願い**

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいませようをお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
(A会員と同一世帯の会員)	
学生会員	2,000円
団体会員 1口	15,000円

〈納入口座〉  
郵便振替口座 02710-7-4055  
北洋銀行大通支店(普通) 0017259  
北海道銀行本店(普通) 0101444  
札幌銀行本店(普通) 418891

〈口座名〉  
社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

